

敵兵を救助した駆逐艦「雷（いかずち）」艦長、
工藤俊作少佐とその心を育んだもの

年頭所感に緑陰随筆で執筆した南雲中将の続きを書こうと思いましたが、なかなか執筆意欲が湧きませんでした。続きを書くとなればあの日米戦争の勝敗の分岐点となったミッドウエー海戦に触れなければならず、未だに平静な気分ではそれを語れない自分であることを知っているからです。そんなところに、開戦記念日の12月8日の産経、および読売新聞の朝刊に、第二次世界大戦中の日英海軍によるインドネシア沖海戦で、漂流中の英兵422人を危険を顧みず救助した旧日本軍駆逐艦「雷（いかずち）」の故工藤俊作艦長をしのぶ墓前祭が7日、埼玉県川口市の薬林寺で開かれたと報じる記事が目に入りました。

この先の大戦中の奇跡的なエピソードについては、2006年に草思社から出版された恵 隆之介著「敵兵を救助せよ！」で詳しく紹介され、またテレビでも取り上げられたので会員にも知っておられる先生もいるのではないかと思います。戦争は人間をあらゆる面で極限まで追いつめるため人間の持っている醜さ、汚さ、嘘、まやかしなどの悪徳面も、また誠実、勇気、献身、愛などの美徳な面もより劇的な形であらわれることが多いと思っています。

朝日新聞や一部のマスコミ、評論家はことさらに日本軍の前者の面を強調します。これは国民の心を次第に蝕み、無差別殺人の多発など社会を崩壊させる毒素として作用しています。元航空幕僚長、田母神俊雄氏の論文はそれを深刻に憂えた結果でしょう。この工藤艦長のエピソードは、大戦中に起こった最も感動的な美談であり、日本人の持っている崇高な精神、武士道を具現化したものであり、それゆえに国民に勇気と誇りを与えるものです。永くそして広く知られ記憶されるべきものと思われまます。

実はこの工藤俊作艦長は、南雲忠一中将と同じく我が母校の米沢興譲館高校（当時は興譲館中学）の大先輩であり、私とは血縁関係はないながらも遠縁にあたる人でもあります。今回はこのエピソードを紹介します。なお事実関係の記述は前掲の著書、および関連するインターネット検索記事からの引用です。

先の日米開戦翌年の1942年（昭和17年2月27日）、ジャワ島北方のスラバヤ沖で、日本艦隊と英米蘭の連合部隊が交戦しました。連合部隊側は艦船15隻中11隻を撃沈で失い、残る4隻は逃走し、撃沈した「エクゼター」（英海軍の巡洋艦）の乗組員多数が救命ボート等による漂流を続けていました。赤道直下、容赦なく太陽が照りつける

中で、漂流者の生存の限界に達しようとしていました。その3月2日、日本海軍の駆逐艦「雷」が海面に浮遊する多数の英国兵を発見したのです。

敵潜水艦が遊弋する危険性海域であり、実際にその前には、日本の病院船の救命ボートが攻撃を受け、158名が命を落とす事態も起きていました。あえて攻撃せずとも見過ごしすることもあり得たでしょう。しかし艦長の工藤俊作少佐は敢然と「敵兵を救助せよ」と命令したのです。「雷」は「救難活動中」を示す国際信号機を掲げ、英国兵の救助に当たったのです。長時間の漂流で体力を消耗している漂流者を海面から拾い上げる救助作業は難航しました。そこで、工藤艦長は「一番砲だけ残し、総員敵溺者救助用意」との命令を発し、船内総力を挙げての救助に当たるよう指示しました。やっとロープに掴まっても、安心したのか沈んでしまう兵もいたということです。雷乗組員はそのような兵を飛び込んで拾い上げました。雷の乗組員は220名ですが、その倍近い422名救助したのです。

「雷」の甲板は救助されたイギリス兵で埋め尽くされました。兵達は撃沈された際に流れた出た重油でべっとりと汚れていましたが、日本兵によって丁寧にアルコールで拭き取られました。そしてシャツと半ズボンと運動靴が支給され、熱いミルクとビール、ビスケットを与えられました。その後、イギリス海軍の21人の士官が集められ、工藤艦長は端正な挙手の敬礼をした後、流暢な英語で「諸官は勇敢に戦われた。いまや諸官は日本海軍の名誉あるゲストである。」とスピーチをしました。このなかに、英国海軍少尉で終戦後スウェーデン大使をつとめるなど、外交官として活躍したサムエル・フォール卿がいました。

救助された英国将兵はようやく元気を取り戻して、翌日抑留中のオランダ病院船に全員移送されました。ある士官は重傷のため一室を提供され看護当番までつけられて手厚く看護されました。艦を去るにあたって工藤艦長に深く感謝し涙をながして握手を求めたということです。士官達は工藤艦長に挙手の礼をして、兵員は嬉しさを体で示して手を振って賑やかに去ってゆきました。

この救助劇はこれで終わりましたが、工藤俊作少佐はやがて中佐に昇進、指揮する艦も変りましたが、その後病気がちとなり艦を降りて内地勤務となりました。駆逐艦「雷」は昭和19年4月13日に米潜水艦の魚雷攻撃を受けて、サイパン島近海で撃沈されました。その夜工藤中佐は、兵達が「艦長」、「艦長」と口々に駆け寄り、自分を中心に輪を作るように集まってやがて静かに消えていく夢を見ました。「雷」に異変が起きたと察知したということです。

終戦後は郷里の山形県高島町に帰りました。そこで農作業などの手伝いをし

ていましたが、夫人かよの姪が埼玉県川口市で医院を開設することになり、その事務長に就任するため、昭和30年に川口市に転居しました。時折、昔の部下が訪れる以外は、海軍時代の同期会、戦友会などに顔を出すことはなく、昭和54年1月、胃がんと闘病の末78歳の生涯を静かに閉じました。海軍時代の内地勤務の間も、また終戦後一市井の人として過ごす生活でも、敵兵救助のエピソードは周囲に、そして夫人にも一切話さなかったということです。そのためこの奇跡的な美談は本邦では誰にも知られず、歴史の深い闇に埋もれてしまっていました。

このエピソードを再び世に出したのは救出された英国海軍士官の一人フォール卿でした。卿は戦後、スウェーデン大使などを勤めるなど外交官として活躍していましたが、この救助劇を一瞬たりとも忘れたことはなく、何とか工藤艦長を探し出し謝意を表したい、そして彼の示した日本の武士道精神を世界に広く知らしめ顕彰したいとの気持ちを持っていたようです。1987年の米海軍機関誌の新年号に詳しい救出劇の報告を投稿し、あるいは1998年の天皇陛下の訪英に合わせて日本軍捕虜を中心とする反日キャンペーンが起きたときに、英タイムズ紙にこの救出劇を詳しく紹介し、「このような武士道精神をもった国の元首を温かく迎えよう」と呼びかけたのです。そのため反日キャンペーンは急速に勢いを失ったということです。

また海上自衛隊の護衛艦が英国を親善訪問するたびに工藤艦長の消息を調査するよう依頼しましたが、自衛隊側が本気で調査した様子はなく進展ありませんでした。卿は外交官を勇退されてから自叙伝を出版しましたが、それには工藤俊作中佐に捧げると献辞が記されています。

工藤中佐の没後、時はさらに4半世紀流れて2003年に海上自衛隊の観閲式が行われた際、フォール卿が日本に招待されて護衛艦「いかづち」（4代目「雷」）の艦上において、61年前のこの救出劇を静かに語りましたが、これが日本人にとって初めてこの偉業を認識するきっかけとなりました。卿はその時すでに84歳の高齢で歩行も不自由でした。工藤中佐がすでに死去されたことを知り、非常に落胆されました。帰りがけに恵隆之介氏に工藤中佐の墓所を尋ねられたことから、恵隆之介氏が一念発起して行動を起こしたことによって、「敵兵を救助せよ」（2006年草思社）という感動的な労作が産み出されました。

工藤俊作艦長はなぜあの緊迫した状況にあつて、冷静沈着に多数の敵国兵を救助するという偉業をなし得たのでしょうか。個人の資質、幼少期の家庭環境、海軍兵学校の教育など様々な要因があると思われませんが、私にはもともと多感な時代を過ごした興讓館中学の建学の精神、そして置賜盆地に連綿と続く慈愛の心が大きく寄与したのではないかと想像します。

上杉鷹山公の時代に創設された米沢藩の藩校「興讓館」という学校名は中国の古典、大学の「一家仁なれば一国仁に興り、一家讓なれば一国讓に興る。一人貪戾なれば、一国乱をなす。」からとられたものです。一家とは一国の君主のことで、藩校の精神的支柱となった江戸時代の実学者、細井平州は仁と讓の二つの徳は、君主の備えるべき最大の美德という思想をもっていました。讓の精神とは他者を敬い、他者と自己が共に生きる道を見いだすことであり、人、あるいは指導者として獲得すべき最高の徳とするものです。私が学んだ高校時代でもこの建学の精神が残っていましたが、工藤俊作少年が学んだ戦前の中学時代にはもっと色濃く残っていたものと思います。スラバヤ沖で行われた敵国兵の救出劇はまさに興讓館精神の発露と言えましょう。

置賜（米沢）盆地には他ではみられない一風変わった供養塔があります。それは上杉鷹山公の時代から建てられ始めたもので、草木にも魂が宿ると考え、木を伐採したときにはその霊を鎮め、再生することを願って建てた草木供養塔です。鷹山公は藩主になるとき「受け継ぎて国のつかさの身となれば忘るまじきは民の父母（図らずも藩主の座を受け継いだからには、父母のように領民を慈しもう）」と詠みました。このような公の慈愛の精神が泉のように城から溢れ出て、乾いた大地を潤すかのように領民の心に広がり、このような一木一草の命をも慈しみ思いやる気持ちを起こさせたのではないかと想像します。

明治17（1884）年には、イギリスの旅行家であるイザベラ・バードが置賜（米沢）盆地に立ち寄りました。バードは、東北・北海道で見聞きしたことを綴った『日本奥地紀行』（平凡社ライブラリー）で、米沢平野一帯の印象をこう記しています。「米沢平野は南に繁栄する米沢の町があり、北には湯治客の多い温泉場の赤湯があり、まったくエデンの園である。鋤で耕したというより鉛筆で描いたように美しい。…〈中略〉…実り豊かに微笑する大地であり、アジアのアルカデヤ（桃源郷）である」生きとし生けるもの、その一木一草まで愛情を注ぐ米沢人の心が、イザベラ・バードをして「東洋のアルカディア」と言わしめる風景を造り出したのでしょうか。工藤俊作少年が生まれた高畠町はまさにこ

の盆地の中心に位置するものでした。私はこのような置賜盆地に生きる人々、その風土に満ちあふれる慈愛の精神が工藤俊作艦長の命を尊重する心を育んだものと確信します。

以上、長文となり誠に恐縮です。最後までお読みいただいた先生に心から感謝します。また工藤艦長の救出劇に関する大部分の記述は、先に挙げた恵隆之介氏の著書、および関連するインターネット記事の引用であることをお断りします。